２．取組を進めるに当たり困難であった事例について

Ａ．コースワークの充実・強化

④社会人、留学生、他分野・他大学からの多様な大学院生に対応した基礎学力補完教育の実施やカリキュラムの提供

≪人社系≫

●関西学院大学社会学研究科社会学専攻

「社会の幸福に資するソーシャルリサーチ教育」の事例

（具体的に何を実施し、何が困難であったのか）

近年の傾向として学部時代にさまざまな学問分野を学んだ学生が社会学研究科に進学していることが指摘できる。とりわけ留学生の場合には、英語能力の点において各人の能力に大きなばらつきが見て取れる。本研究科のカリキュラムでは英語での文献講読科目を必修にしているので、その点に鑑み主として留学生を対象とした外国語（英語）の授業提供の改善を試みた。その過程において、担当教員の確保、ならびに学生個人の習熟度を踏まえたうえでの授業内容の策定等は容易ではなかった。

（苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか）

留学生の場合、その出身地ならびに教育を受けた時期によって現在保持している英語能力が一律ではない。そのため、各人の英語読解能力等を見極めた上で、きめ細かな授業内容の策定ならびに運営の実施が求められる。そのことが、当該科目の改善を進める上での困難の原因であったと判断される。

（どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか）

英語文献講読クラスを二クラスに分割して開講し、その一方を主として留学生を対象としたクラスとして運営した。その結果、受講生の能力とニーズに対応した科目提供を実現できた。受講生による授業評価からも、その教育的効果はきわめて望ましいものであったと判断される。（留学生入学者数(前期・後期課程計)：平成 20 年度 3 名、平成 21 年度 2 名、平成 22 年度 2 名）

２．取組を進めるに当たり困難であった事例について

Ｃ．教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

②大学院生や教員相互のピアレビューでの授業評価による教育指導の改善

≪人社系≫

●関西学院大学社会学研究科社会学専攻
「社会の幸福に資するソーシャルリサーチ教育」の事例

（具体的に何を実施し、何が困難であったのか）

大学院で開講される全ての科目に関して受講生による授業評価を実施した。しかしながら、少人数での授業が中心となる大学院での授業においては、回答者個人が特定できる可能性が感じられるため受講生側に授業評価することへの抵抗感があるように感じられた。

（苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか）

結果的に科目ごとの授業評価の回答件数に差異があり、授業評価の結果をデータとしてカリキュラム全体の検討に活かすことは困難であった。

（どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか）

院生各人による授業評価実施後に、院生の代表者と大学院教務・学生正副委員が面談する機会を持ち、授業評価の概要を踏まえて授業カリキュラムに関して意見交換する機会を設けた。その結果、アンケート式の授業評価だけでは把握できない授業に関する課題や問題点を明らかにすることができた。